

(19)日本国特許庁 (J P)

(12) 公 開 特 許 公 報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開2000-103478

(P2000-103478A)

(43)公開日 平成12年4月11日(2000.4.11)

(51)Int.Cl. ⁷	識別記号	F I	テーマコード*(参考)
B 6 5 D 81/34		B 6 5 D 81/34	D 3 E 0 6 7
3/22		3/22	C
81/38		81/38	E

審査請求 未請求 請求項の数1 O L (全 3 頁)

(21)出願番号 特願平10-277080

(22)出願日 平成10年9月30日(1998.9.30)

(71)出願人 000002897

大日本印刷株式会社

東京都新宿区市谷加賀町一丁目1番1号

(72)発明者 鹿谷 幸博

埼玉県狭山市大字上広瀬591番地の10 大
日本カップ株式会社内

(72)発明者 柳田 恭博

埼玉県狭山市大字上広瀬591番地の10 大
日本カップ株式会社内

(74)代理人 100096600

弁理士 土井 育郎

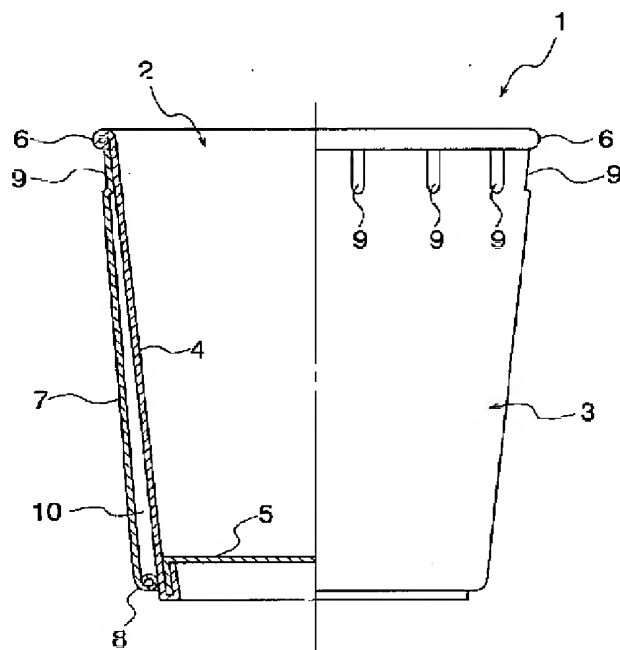
最終頁に続く

(54)【発明の名称】 断熱性容器

(57)【要約】

【課題】 胴部のいずれの場所を手で持っても内容物の熱が伝わり難い優れた断熱性容器を提供する。

【解決手段】 上方開口縁に外向きカール部6を有する紙カップ本体2と、上方及び下方共に開口しており下方開口縁に内向きカール部8を有する紙製の外筒3とからなり、外筒3にはその胴部上方に内側に凹んだ縦罫線9が所定間隔で複数本設けられており、その外筒3を紙カップ本体2に被せて外筒3の胴部上方に設けられた縦罫線9の凹部内面を紙カップ本体2の胴部上方の側壁外周面に接着して両者を一体とすることにより形成され、紙カップ本体2と外筒3の間に空隙10が形成されたものにする。下方から外筒3の縦罫線9のところまで断熱用の空隙10がある程度の間隔で形成されるので、胴部のいずれの場所を手で持っても内容物の熱が伝わりにくい。



【特許請求の範囲】

【請求項1】 上方開口縁に外向きカール部を有する紙カップ本体と、上方及び下方共に開口しており下方開口縁に内向きカール部を有する紙製の外筒とからなり、外筒にはその胴部上方に内側に凹んだ縦罫線が所定間隔で複数本設けられており、その外筒を紙カップ本体に被せて外筒の縦罫線の内側面を紙カップ本体の胴部上方の側壁外周面に接着して両者を一体とすることにより形成され、紙カップ本体と外筒の間に空隙が形成されていることを特徴とする断熱性容器。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】本発明は、インスタントラーメンなどの即席食品を入れるカップ状の容器に係り、特に熱湯を注いでそのまま食することのできる断熱性に優れた容器に関するものである。

【0002】

【従来の技術】一般に、この種のカップ状をした断熱性容器としては、発泡ポリスチレンなどのプラスチック製のものが多用されていたが、これらは廃棄した場合に公害問題になることから、これに代わるものとして、例えば実開平4-45212号公報に見られるように、胴部を二重にして断熱用の空隙を形成した紙製の断熱性容器が提案されている。

【0003】

【発明が解決しようとする課題】従来の技術で述べた実開平4-45212号公報に記載の断熱性容器は、通常の紙カップに対してテーパの異なった底なしの外筒を組み合わせたという簡単な構成により断熱効果を有するカップが得られるという利点がある。そして、断熱用の空隙が下方に行くほど大きくなっているため、通常の持ち方では良好な断熱効果を発揮する。しかしながら、上部寄りのところをつかんで持つ状態が長く続くと、断熱効果を発揮する空隙が無いとか又は狭いので、段々と熱くなってくるという問題点がある。

【0004】本発明は、上記のような問題点を解決するためになされたものであり、その目的とするところは、胴部のいずれの場所を手で持っても内容物の熱が伝わり難い優れた断熱性容器を提供することにある。

【0005】

【課題を解決するための手段】上記目的を達成するために、本発明の断熱性容器は、上方開口縁に外向きカール部を有する紙カップ本体と、上方及び下方共に開口しており下方開口縁に内向きカール部を有する紙製の外筒とからなり、外筒にはその胴部上方に内側に凹んだ縦罫線が所定間隔で複数本設けられており、その外筒を紙カップ本体に被せて外筒の縦罫線の内側面を紙カップ本体の胴部上方の側壁外周面に接着して両者を一体とすることにより形成され、紙カップ本体と外筒の間に空隙が形成されていることを特徴としている。

【0006】

【発明の実施の形態】次に、図面を参照しながら本発明の実施形態について説明する。

【0007】図1は本発明に係る断熱性容器の一例を示すもので、左半分及び右半分をそれぞれ断面図と正面図で示す概略構成図であり、同図の断熱性容器1は、紙カップ本体2と上方及び下方共に開口した中空円筒状の外筒3とで構成されている。

【0008】紙カップ本体2は、内面若しくは内外両面にポリエチレン等の合成樹脂をコーティングした紙からなるもので、通常の紙カップと同様に胴部4の下方に底板5を巻き締めると共に上方開口縁に外向きカール部6が形成されたものである。

【0009】一方、中空円筒状の外筒3は、紙単体若しくは片面又は両面にポリエチレン等の合成樹脂をコーティングした紙からできており、胴部7の下方開口縁に内向きカール部8が形成されている。また、外筒3はその胴部7が紙カップ本体2の胴部4より裾が少し広がったテーパを有するもので、その胴部上方に内側に凹んだ縦罫線9が所定間隔で複数本設けられている。そして、縦罫線9の凹部内面が紙カップ本体2における外向きカール部6直下の側壁外周に接触すると共に胴部7の下方開口縁の内向きカール部8が紙カップ本体2の下方の側壁外周に接触する大きさとされている。

【0010】そして、紙カップ本体2に上記構成の外筒3を被せ、外筒3の胴部上方に設けられた縦罫線9の凹部内面を紙カップ本体2の胴部上方の側壁外周面にエマルジョン系接着剤等の手段で接着して両者を一体とすることにより、図1の断熱性容器1が形成されている。なお、使用形態によっては、外筒3の下方開口縁に形成された内向きカール部8の部分も紙カップ本体2の下方の側壁外周面に接着することにより、紙カップ本体2と外筒3の結合をより確実なものにしてもよい。

【0011】上記構成の断熱性容器1においては、紙カップ本体2の胴部4と外筒3の胴部7の間に空隙10が形成され、この空隙10の部分が断熱作用を果たす。しかも、外筒3の胴部上方に内側に凹んだ縦罫線9を設けてあるので、下方からこの縦罫線9のところまで空隙10がある程度の間隔で形成される。したがって、断熱性容器1に例えば熱湯を入れた場合、内側の胴部4の熱が外側の胴部7に伝わるのが広い範囲に渡って防止され、この種の容器において通常把持されるどの場所をつかんで持っても熱くなることがない。

【0012】また、紙カップ本体2の胴部4に、周囲方向であって内面側又は外面側に突出する突条を形成して、熱湯を注ぐ時の目安となる注入基準線を設けてもよい。紙カップ本体2に注入基準線を設けた場合には、縦罫線9を注入基準線よりも上方に設けることが好ましい。このような構成とすることにより、注入基準線まで注がれた熱湯の熱が縦罫線9を介して外筒3の胴部7に

直接伝わるのが防止される。

【0013】

【発明の効果】本発明の断熱性容器は、上方開口縁に外向きカール部を有する紙カップ本体と、上方及び下方共に開口しており下方開口縁に内向きカール部を有する紙製の外筒とからなり、外筒にはその胴部上方に内側に凹んだ縦罫線が所定間隔で複数本設けられており、その外筒を紙カップ本体に被せて外筒の縦罫線の内側面を紙カップ本体の胴部上方の側壁外周面に接着して両者を一体とすることにより形成され、紙カップ本体と外筒の間に空隙が形成されている構成としたので、下方から外筒の縦罫線のところまで断熱用の空隙がある程度の間隔で形成されることから、胴部のいずれの場所を手で持っても内容物の熱が伝わりにくいという断熱性に優れたものとなる。

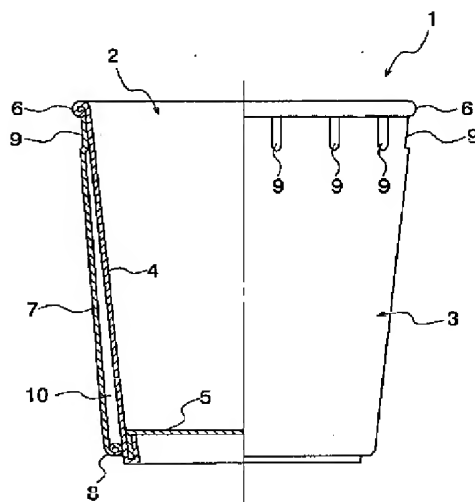
【図面の簡単な説明】

【図1】本発明に係る断熱性容器の一例を示すもので、左半分及び右半分をそれぞれ断面図と正面図で示す概略構成図である。

【符号の説明】

- 1 断熱性容器
- 2 紙カップ本体
- 3 外筒
- 4 胴部
- 5 底板
- 6 外向きカール部
- 7 胴部
- 8 内向きカール部
- 9 縦罫線
- 10 空隙

【図1】



フロントページの続き

(72)発明者 清水 秀貴
東京都新宿区市谷加賀町一丁目1番1号
大日本印刷株式会社内
(72)発明者 山県 勝弘
東京都新宿区市谷加賀町一丁目1番1号
大日本印刷株式会社内

(72)発明者 向井 峰夫
東京都新宿区市谷加賀町一丁目1番1号
大日本印刷株式会社内
Fターム(参考) 3E067 AA03 AA11 AB01 BA07A
BB01A BB26A CA18 EA04
EC22 ED03 EE07 GA12